

平成 27 年度図書館情報学海外研修 報告書（抜粋版）

図書館情報メディア研究科 博士前期課程 1 年

201521644 松山麻珠

1. 研修の概要

研修期間：2016 年 1 月 18 日 ～ 2016 年 1 月 26 日

訪問先：

- Biblio Tech (Biblio Tech Pleasanton, Dr.Ricardo Romo Biblio Tech)
- サンアントニオ公共図書館 (Central Library)
- テキサス大学サンアントニオ校 (John Peace Library, Applied Engineering and Technology Library)
- ニューヨーク公共図書館 (Stephen A. Schwarzman Building - Main Branch, Science, Industry and Business Library, Mid-Manhattan Library, Mulberry Street Library)

2. 目的

電子書籍先進国といわれるアメリカでは、90%を超える公共図書館で電子書籍の貸出が行われている。しかし、日本国内の公共図書館ではいまだ電子書籍サービスが浸透せず、貸出サービスはおよそ 30 館の実施にとどまっている。アメリカ初となった電子資料のみをもつ公共図書館 Biblio Tech, 同じく紙のない大学図書館であるテキサス大学サンアントニオ校の Applied Engineering and Technology Library, 同地域にあるサンアントニオ公共図書館, アメリカの代表的な公共図書館であるニューヨーク公共図書館を訪問調査し、図書館における電子書籍について、サービス、館内ディスプレイ、図書館広報等の視点から考察することを本研修の目的とした。

3. Biblio Tech

テキサス州サンアントニオの Biblio Tech は、「米国初の紙の本のない公共図書館」として 2013 年にオープンした新しい図書館で、Apple Store からインスピレーションを受けてデザインされた館内は、近未来を連想させる刺激的な空間だった。ペーパーレスを徹底し、PC の配線を隠したり、壁面に AR を配置したりと、細やかな工夫が見られた。しかし、電子書籍端末の貸出利用は盛んに行われているというものの、館内に滞在していた利用者たちが読書している様子はあまり見られず、読書や電子書籍利用に関する図書館広報も少なかった。低所得層の割合が高くネットワーク環境が自宅にない利用者が多いという土地柄か、インターネット利用・PC 利用の場として Biblio Tech を利用している人が多いのではないかと考えられる。

4. テキサス大学サンアントニオ校

「米国初の紙の本のない大学図書館」であるテキサス大学サンアントニオ校の Applied Engineering and Technology Library は、資料を入手するための図書館というよりは、居心地の良い学習スペースをメインライブラリーの分館として提供するものという印象を受けた。設置してある端末からは電子資料の閲覧や貸出が可能だが、実際に図書館を利用している学生たちは、館外から持ち込んだ本や私物の PC を使って静かに学習していた。メインライブラリーよりも気軽に電子資料が読めて、かつ集中して学習できる場所として利用が広がっているようだ。

5. サンアントニオ公共図書館

サンアントニオ公共図書館では、館内の目立つところに電子書籍の利用方法の案内が掲示され、電子資料を検索・貸出するための端末が並んでいるコーナーもあった。また、壁に本棚を模した絵が印刷され、本の表紙や背表紙の QR コードから電子書籍の貸出ページにアクセスできるという展示や、司書による「Book Picks」の棚では、紙の本を置かずに本の紹介文と QR コードを展示していた。ここでは、訪れた人々と紙の本との接点だけでなく、電子書籍との接点もリアルな空間で作る工夫がいろいろなところに散りばめられていた。

6. ニューヨーク公共図書館

ニューヨーク公共図書館では、図書館内で電子書籍利用に関する目立った展示や案内を見かけることはほとんどなかったが、蔵書検索ページでは紙書籍と電子書籍が同じように検索でき、「eBook Help Hour」などの講座が開かれていたりしていた。既に電子書籍サービスが定着し、貸出数も多いニューヨーク公共図書館では、利用者が好みやシチュエーションに応じてメディアの種類を自由に選ぶことができる仕組みが整っているのだろう。電子資料は図書館を訪れなくてもネットワーク環境さえあればどこでも利用できるからこそ、ニューヨークのような都会の街で人々がどのように利用しているのか実態をつかみにくいということも実感した。様々なイベントや研究図書館による支援なども魅力的だが、街中に 92 ものランチがあり電子書籍利用の盛んなニューヨーク公共図書館だからこそ、電子書籍と利用者との接点を生み出す展示を行ったり、電子書籍をブラウジングして気軽に借りることができる図書館ならではの仕組みを作ったりして、図書館に立ち寄る人々を増やすような工夫がもっと広がっていくことを期待する。

7. 図書館の空間利用

また、研修中、電子書籍サービス以外で特に印象的だったのは、図書館の空間利用に関することであった。

テキサス大学サンアントニオ校のメインライブラリーである John Peace Library は、メインフロアの全域がラーニングコモンズとして機能しており、学生が大勢利用する活気のある大学図書館だった。「Quiet Study」,「Group Spot」,「Tutoring Services & QLab」などのゾーンに区切られ、それぞれに利用目的やルールが決められている。場所を提供するだけでなく、滞在目的によってゾーンを選び、居心地よく学習できるような仕組みが出来上がっていた。

また、ニューヨーク公共図書館では、観光客が集まる街のシンボルとしての図書館、ビジネス・求職の拠点となっている研究図書館、地元の人々が本を読んだり勉強したりできる図書館、などランチごとに果たす役割が異なっていて、それぞれの役割に応じた空間づくりが進んでいた。さらに、今回見学した Mid-Manhattan Library や Mulberry Street Library のような地元の人々が利用する図書館では、大人、ティーン世代、子ども、とスペースを明確に分けていることが特徴的だった。子どもたちは大人に邪魔されることなくいきいきと図書館での時間を過ごしていた。

8. まとめ

電子書籍サービスの提供が日本より格段に進み、目的に応じた様々な空間を提供するアメリカの図書館の見学を通して、これから将来の図書館について考えるときに、資料の利用についてだけでなく、図書館という空間がどのように利用されるかということについて広く考えていく必要があると思うようになった。これから電子資料の割合が増えていくとしたら、資料を探すことも、閲覧も、貸出の手続きもすべてオンラインで済ませることができるようになり、箱モノの図書館の必要性が薄まる可能性もある。多くの個人がコンピュータを持つようになった今、Biblio Tech のような、PC やタブレット端末が並ぶ場所が次世代の図書館の姿になるとは考えにくく、紙の本が図書館からなくなるのならば、実体のある図書館はもはや必要なくなるだろう。紙だけ、電子だけではなく、2 つが共存して、それぞれの良さを把握し、場合によって自由を選べる環境を作ることが今図書館に求められていることなのではないだろうか。

9. おわりに

今回の研修は私にとって初めての海外体験で、出発から帰国まであらゆることが新鮮に映り、たいへん実のある 9 日間だった。ニューヨークでは滞在 2 日目から大雪が降り、交通機関もストップし、なんとか徒歩でたどり着いたニューヨーク公共図書館のランチで全館休館を知り途方に暮れる場面もあった。無事に帰国できて本当に良かった。

謝辞

今回、このような貴重な機会を与えてくださった図書館情報メディア研究科、知識情報・図書館学類、茗溪会支部図書館情報学橋会の皆様には厚く御礼申し上げます。また、本研修を実施するにあたり、多くの支援とご指導をいただきました指導教員の池内淳先生、宇陀則彦先生、松村敦先生、長谷川秀彦先生に心より感謝申し上げます。

